

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 3 月 31 日現在

機関番号：17101

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520250

研究課題名（和文） 20 世紀前半のイギリスにおける使用人の研究：その衣服、生活、文学表象について

研究課題名（英文） A Study of Servants in the First Half of 20th Century Britain: their Clothing, Lives, Literary Representations

研究代表者

西村 美保（NISHIMURA MIHO）

福岡教育大学・教育学部・教授

研究者番号：60284452

研究成果の概要（和文）：

平成22年度～24年度の本研究の研究成果は以下のとおりである。本研究は20世紀前半のイギリスを舞台とした文学作品を取り上げ、使用人に光をあてその文学表象を吟味した。使用人の質の低下、使用人不足と言った深刻な使用人問題が支配階級の人々の会話に登場し、高等教育を受けた使用人も登場している。本研究は、現地における使用人の衣服調査を行い、使用人の人口変化の考えられる様々な要因についても明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The results of my research from 2010 to 2012 are as follows. This research examines representations of servants in British fictions which are set in the first half of the 21th century, where the ‘servants problems’ are treated again and again and the contents of ‘servants problems are getting more serious than in Victorian novels. In addition, this research includes a field study of servants’ clothes and introduces several items actual female servants wore. Besides, several reasons why servants’ population decreased in the first half of the 21th century were made clear.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：英文学、地域研究、ヴィクトリア朝、生活文化、服飾、20世紀、イギリス文化

1. 研究開始当初の背景

本研究を開始する以前、ヴィクトリア朝の女性使用人の衣服、生活、文学表象の3点について、研究を行っていた。しかし、ヴィクトリア朝の特色は、その後の20世紀前半の

女性使用人の実態について研究しないと本当の意味では浮き彫りになってこないと感じ、本研究テーマについて、研究を開始した。

2. 研究の目的

20世紀初頭は、ヴィクトリア朝の名残があったが、20世紀半ばまでに女性使用人の数は確実に減っていった。その原因を探り、彼女たちの衣服、生活、文学表象について、吟味し、ヴィクトリア朝の女性使用人の場合と比較することで、差異を明確にすることが目的である。

3. 研究の方法

女性使用人の生活については、20世紀になると、元使用人のインタビュー記録が残っているので、それらを博物館から取り寄せて、吟味した。また、元使用人の回想記や、使用人についての研究書を参考にした。衣服については、連合王国の博物館に調査に出かけた。文学表象については、20世紀のイギリス小説や映画を吟味した。

4. 研究成果

平成22年度から平成24年度にかけて行った本研究の成果の一つは、20世紀前半のイギリスにおける使用人の衣服、生活、文学表象について正確で具体的な情報を入手することができたことであり、二つ目は、上記テーマのうち、衣服、文学表象、それぞれについて異なる学会において、研究発表を行うことができたことである。そして、3つ目として、研究発表したことを基にして、論文にまとめることができたことである。

年度ごとの研究成果は、具体的には以下のとおりである。

平成22年度は、英国ダラム近郊の博物館、Beamish, The Living Museum of the North 提供のアーカイブス資料（元女性使用人のインタビュー記録）を精読して、本研究テーマについて分析を行った。次に、シルヴィア・マーロウ著、『イギリスのある女中の生涯』に書かれた情報を整理し、前掲のBeamish Museumのアーカイブス資料の情報と比較、検討した。8月下旬には韓国ソウルへ出張し、国立中央博物館で開催された「第24回国際服飾学術会議」で、ヴィクトリア朝の女性使用人の衣服と慣習について、20世紀前半の状況に照らし合わせ、英語による研究発表を行った。質疑応答では、フロアから日本人研究者だけでなく韓国の研究者からも質問が出て、本研究の発表内容に対する強い関心が示された。イギリスの女性使用人が実際に着用した衣服の調査や当時の階下の生活慣習についての研究は珍しく意義深いと注目された。9月からは特に戦後の使用人の数の減少とその要因について研究を進めた。20世紀初頭には、まだ使用人の数はさほど減ってはい

なかったが、産業革命の影響で工場が数多く出現して、働く場所が増えたために、19世紀後半から女性使用人に対する人気に陰りが出ていたと言われている。20世紀になると政府が人気のない理由の調査に踏み出した。その理由には、女性使用人の仕事がハードで、時間の自由がないことや、歴史的に出版業界において、カリカチュアなどで女性使用人は笑いものとなってきたこと、女性使用人の社会的階級の低さなどが挙げられたが、彼女たちが着用しなければいけないユニフォームについての不満もあった。インタビューを受けた女性たちの中には、女性使用人のユニフォームを隷属の印と見る者もいた。そのような見方をする者が出てきたこと、そして、その見方を言葉にする能力を持ち合わせる者が出てきたことは、教育制度の改善と関連がなくはないだろう。

平成22年度10月下旬には日本ハーディ協会において、トマス・ハーディの小説、『エセルバータの手』における使用人の表象について口頭発表を行った。ハーディの小説を使用人に焦点を当て、分析した研究ということで、視点が新しく、『エセルバータの手』という従来あまり評価が高くなかった作品の良さを浮き彫りにして作品理解を助けるような内容であることから、高い評価を得た。年が明けて1月からは文学テキストにおける使用人の表象に関する批評書を精読し、その一方で、Kazuo Ishiguro, The Remains of the Day（『日の名残り』）、Evelyn Waugh, Brideshead Revisited（『ブライズヘッド再訪』）の2冊を取り上げ、使用人の表象を吟味した。

平成23年度は4月～5月にかけては、ヴィクトリア朝小説と20世紀小説における使用人の表象を比較検討するため、ステイブンソンの『ジキル博士とハイド氏』における使用人の表象を分析し、論文を執筆した。その一方で、20世紀前半のイギリスの女性使用人の生活と衣服について正確な情報を得るため、Staffordshire County Museumから元女性使用人のインタビュー記録を取り寄せた。以前から手元にあった、Beamish, The Living Museum of the Northの前掲のアーカイブス資料も再度精読し、分析を行い、20世紀初頭に女性使用人として働いた女性たちの手記と比較した。20世紀前半の女性使用人の衣服を所蔵している連合王国の博物館にコンタクトを取り、8月には、Staffordshire County Museumをはじめとする連合王国の博物館と公文書館へ資料収集のための出張を行った。

イギリスの博物館で行った20世紀の使用人の衣服調査では、数多くの女性使用人の衣服を吟味することができた。帽子は外観はほとんどヴィクトリア朝のものと変わらないが、ほとんどのものがミシンの縫製となっている。衣服については、丈が短くなって、現代のワンピースと変わらないようなものがあり、明らかに、社会全体の衣服の流行に影響を受けている。またハロズの商標などがついている衣服もあり、既製品であることが一目瞭然の衣服もある。

9月には、収集した資料をもとに、20世紀初頭のイギリスにおける女性使用人の衣服と生活について、論文を執筆した。10月からは使用人の数の減少とその要因について、再度関連文献にあたり、吟味した。カントリーハウスと貴族をめぐる状況の変化とそれが使用人に与えた影響についても22年度に引き続き、考察した。11月～3月(2012)にかけては、20世紀前半のイギリスを舞台にした、使用人の登場する小説を主従の依存関係、「使用人問題」に焦点を置き、分析する一方で、ヴィクトリア朝小説であるディケンズの『デイヴィッド・コッパーフィールド』における使用人の表象との比較を行った。

平成24年度は、文学表象に関しては、4月～8月にかけて、Kazuo IshiguroのThe Remains of the Day (1989)や、アガサ・クリスティーをはじめとする使用人の登場するドラマや映画を、9月～翌年2月にかけては、Evelyn WaughのBrideshead Revisited (1945)とMargaret ForsterのLady's Maid (1990)を吟味して、それぞれの作品における使用人の表象について考察した。それらと並行して、チャールズ・ディケンズやブロンテ姉妹、トマス・ハーディなど、ヴィクトリア朝小説における女性使用人の表象を20世紀小説と比較しながら吟味し、研究書を精読して、分析と考察を続けた。一方で、使用人の衣服と生活については連合王国で収集した資料や写真の精査を行いヴィクトリア朝の女性使用人の写真や衣生活と比較検討を行った。

平成24年度は、20世紀の使用人をめぐる状況や、20世紀英文学における女性使用人の表象を念頭に置きながら、博士論文「ヴィクトリア朝の女性使用人の表象——ディケンズ、ブロンテ、ハーディ——」も執筆して、武庫川女子大学大学院文学研究科(英語英米文学専攻)に提出した。

イギリス文学には、使用人が登場し、語り手として重要な役割を果たす作品もあれば、脇役ではあるが、プロットなど、構造に深く関わっている作品もある。登場人物としての

役割の重要性に程度の差があっても、使用人が登場し、何らかの形で作品の構造に影響を及ぼしている文学を総じて「使用人文学」と呼ぶなら、イギリス文学には古くから「使用人文学」の系譜が存在すると思われる。その系譜の始まりを特定するのは困難だが、18世紀以降では、「使用人文学」の代表的なものがサミュエル・リチャードソン(Samuel Richardson)のPamela; or, Virtue Rewarded (『パメラ: 報いられた美德』(1740))であることは誰もが認めるところだろう。そして、現代文学においても、カズオ・イシグロ(Kazuo Ishiguro)のThe Remains of the Day (『日の名残り』(1989))、マーガレット・フォスター(Margaret Forster)のLady's Maid (『侍女』(1990))など、使用人が語り手である小説は絶えないことから、「使用人文学」の系譜は現在まで脈々と続いていると言えるだろう。博士論文では、「使用人文学」の系譜の中で、ヴィクトリア朝小説がどのような特徴を持っているかを明らかにすべく、当時の代表的な3人の作家、チャールズ・ディケンズ(Charles Dickens (1812-70))、ブロンテ姉妹(Anne Brontë (1820-49))、Charlotte Brontë (1816-55))、トマス・ハーディ(Thomas Hardy (1840-1928))の作品における女性使用人の表象を吟味した。現実の女性使用人についての調査を踏まえた上で、上記の3人の作家たち——ディケンズ、ブロンテ姉妹、ハーディ——による女性使用人の文学表象と実態とを比較して、テキストにおいて描写される女性使用人の姿が現実の女性使用人の実態と異なる場合、作家の意図について考察した。また、サミュエル・リチャードソンや、W. M. サッカレー、エリザベス・ギヤスケルといった他の作家による女性使用人の表象と比較することで、作家間の類似点と相違点を明るみに出すよう、努めた。

第1章と第2章では、ディケンズの作品——David Copperfield (『デイヴィッド・コパフィールド』(1849-50))とOliver Twist (『オリヴァ・ツイスト』(1837-39))——を、第3章と第4章では、ブロンテ姉妹の作品——アン・ブロンテのAgnes Grey (『アグネス・グレイ』(1847))とシャーロット・ブロンテのJane Eyre (『ジェイン・エア』(1846))——を、第5章から第7章にかけては、ハーディの作品——Far from the Madding Crowd (『遙か狂乱の群を離れて』(1874))、The Hand of Ethelberta (『エセルバータの手』(1876))、Tess of the d'Urbervilles (『ダーバヴィル家のテス』(1891))——を扱った。

女性使用人は、ジェンダーと階級の両面で支配と搾取を受けがちな存在であるが、その状況下で幸福を感じ、自らの仕事に誇りを持って働く者、屈辱を感じる者、その職種の階級の中で、上位に在ることに優越感を覚え、下の女性使用人を見下そうとする者、雇い主に取り入り、結婚によって階級のはしごを登ろうとする者、雇い主と対峙して、人間としての本質的な平等を叫ぶ者、雇い主の弱みや秘密を握り、脅かす者など、様々な女性使用人の姿を本研究を通じてヴィクトリア朝小説に見出すことができた。そして、こうした多様な女性使用人の表象を通して、背景となるヴィクトリア朝社会の複雑で、矛盾に満ちた価値観や女性観、そして作家たちの多様な意図と思惑を読み取ることができた。

20世紀になると、特に1930年代をピークとして使用人は激減していく。Kazuo Ishiguroの『The Remains of the Day』(1989)をはじめとして、20世紀の使用人が登場する文学、ドラマ、映画などで使用人の不足について言及されている。また、使用人が雇主を困らす「使用人問題」について、頻繁に取り上げられ「使用人問題」の質も変化している。20世紀小説あるいは20世紀の元使用人の手記においては、使用人の確保が難しいことから、使用人が優位に立ち、雇主を困らせる度合いが強くなり、服従や隷属に対する反発が強くなっていることが窺える。

1920年代を舞台としたアガサ・クリスティの小説のアダプテーションにおいては、使用人が多く登場し、犯罪の目撃者となったり犯人逮捕に至る重要な助けとなったりするが、ヴィクトリア朝の使用人とは違い、高等教育を受けた使用人も現れる。雇い主たちの会話には、「使用人問題」がテーマとなることもある。「使用人問題」の極端な形は、1963年のハロルド・ピンターの映画、『The Servant』‘において、顕著に表れている。この作品の中で、主人を見下す男性使用人が、主人を騙し、落ちぶれるよう仕向けて行く。原作はロビン・モーム (Robin Maugham) による同名の小説 (1948) である。

以上のように、本研究においては、20世紀前半の使用人の衣服と生活について調査をする一方で、「使用人文学」の系譜をたどってきた。イギリスの使用人の文学表象はこれまでほとんど注意を向けられることがなかったため、本研究が行った前景化——使用人に光をあて使用人をテキストにおいて浮かび上がらせること——だけでも、文学研究としては、意義深いものである。その上、本研

究は、現地における使用人の衣服調査を行い使用人の人口変化と、考えられる様々な要因について考察を試みた。本研究によって、ヴィクトリア朝から20世紀前半にかけてのイギリス社会の変化とイギリス文学の変容について、深く洞察することができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2件)

①西村 美保、「20世紀初頭のイギリスにおける女性使用人の衣服と慣習」『福岡教育大学紀要 第61号 第一分冊』2012年。pp. 83-96.

②西村 美保、「『エセルバータの手』における使用人の表象—文化的アプローチ」『ハーディ研究 日本ハーディ協会会報 No. 37』2011年。

〔学会発表〕(計 4件)

①西村 美保、「20世紀初頭のイギリスにおける使用人の衣服をめぐって—Shugborough, Walsall, Manchesterにおける現物調査報告」アメリカ服飾社会史研究会、2013年 2月 2日、西宮浜産業交流会館(西宮市西宮浜 1-21)。

②西村 美保、「20世紀初頭のイギリスにおける女性使用人の装い」アメリカ服飾社会史研究会、2011年 7月 16日、なるお会館(兵庫県 西宮市)。

③西村 美保、「『エセルバータの手』における使用人の表象」日本ハーディ協会、2010年 10月 30日、同志社女子大学。

④西村 美保、「The Clothing and Customs of Victorian Female Servants」The 24th International Costume Congress, 2010年 8月 24日、National Museum of Korea, Seoul.

〔図書〕(計 1件)

①西村 美保、共著者：高山吉張 他。「2重生活の連鎖と文化的背景—『ジキル博士とハイド氏の怪事件』における使用人の表象—」『大榎茂行教授喜寿記念論文集 イギリス文学のランドマーク』, pp. 279-287. 大阪教育図書 2011年。

〔その他〕

①西村 美保、「ヴィクトリア朝小説における女性使用人の表象——ディケンズ、ブロンテ、ハーディ——」、学位(博士「文学」)

論文、武庫川女子大学大学院研究科（英語英米文学専攻）。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西村 美保 (NISHIMURA MIHO)
福岡教育大学・教育学部・教授
研究者番号：60284452

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし